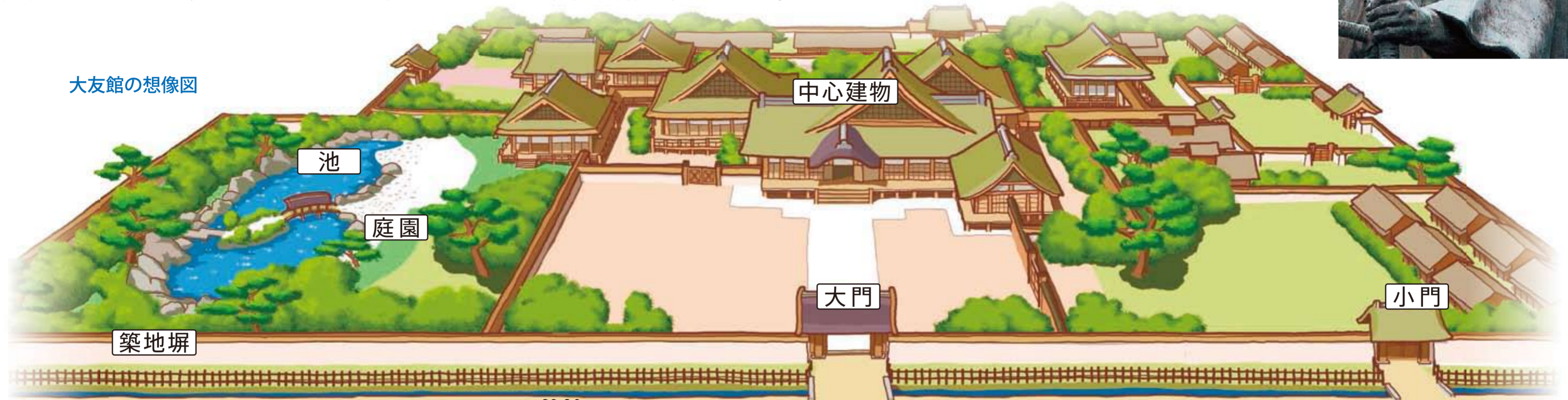


大友宗麟の国づくり



おおともそうりん
大友宗麟は、1530年、大友家20代当主義鑑よしあきの長男として豊後府内(大分市)に生まれました。20歳の時に大友家を継ぎ、豊後を中心に国づくりをすすめて、足利将軍から九州6カ国の守護職を与えられる戦国大名に成長しました。そして海外との交流を進めながら、府内にこれまでに見たことない大規模な館を築きました。

大友館の想像図



宗麟は、まちの中心にあった「大友館」を嫡男義統よしむねのために大改修しました。200m四方に広げられた館は、高い塀で囲まれ、東西に長さ83mの庭園をもつ、日本でも最大規模のものでした。また館の中の大きな建物では、一度に200人の武士が集まって祝宴などが行われました。この館は、大友家にとって“権威の象徴”としての役割がありました。



発見された「かわらけ」

大友館跡からは、大量の「かわらけ」(素焼きの土器)が発見されています。これらは儀式や祝宴に用いられ、通常一度しか使われずに棄てられました。正月の参賀では、家臣たちは地位や役割によって対面の順番や日時、場所が決められていました。このような行事や儀式が毎月のように行われた館は、家臣たちが大友氏への恭順きょうじゆんの意を示す場でもありました。



大砲「国崩し」

海外に進出

宗麟は、南蛮人と呼ばれていたポルトガル人との貿易に力を入れると共に、自ら大きな船を建造して中国や東南アジアの国々に家臣や商人を送りました。また戦いを有利にするため、大砲をポルトガルから入手し、それを府内で製造させました。

宗麟は、豊後の家臣団と共に、南蛮貿易によって得た財力や技術を使って国づくりを進めていきました。